自立貢献

あいさつは　あふれる笑顔の　あいことば

横浜市立錦台中学校 学校だより
発行日　平成28年１月８日（金）
発行者　学校長　枝 迫 大 成
所在地　神奈川区西寺尾3-10-1
電話401-3644　FAX431-0244
URL　http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/jhs/nishikidai/

「タスキをつなぐ」

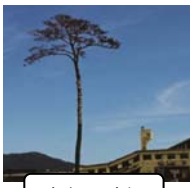
校長　枝 迫　大 成

平成28年 新しい年がスタートしました。皆様には、素敵な新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。今年の正月は全国的に晴天に恵まれ、初日の出を拝んだ人も多かったのではないかと思います。毎日必ず日の出はありますが、初日の出はその年の始まりに初めて昇ってくる太陽のことで、一年の健康と幸運を祈るという意味で初日の出に思わず手を合わせてしまいます。今年の私はまだ昇りつつある陽に手を合わせて、今年の健康を祈願しました。ちなみに、元日とは、１月１日の１日の全時間帯の２４時間を指します。また元旦は、元日の夜明け、日の出の頃の時間です。元旦の「旦」は、下の線が地平線を、上の日は太陽を表していて、「地平線から昇る太陽」を表現した漢字なのだそうです。本当に美しい意味が込められていますね。

さて、正月の名物でもあり、毎年名勝負が繰り広げられ感動を与えてくれるものの一つに「箱根駅伝」があります。今年もテレビを見ていると、ふらふらになりながらも次の仲間にタスキを渡すために懸命に走ろうとする姿、ものすごい力走で次々と追い抜く姿、給水係のチームメイトが数十メートル伴走し励ましの声をかけながら水を手渡し、それを笑顔で選手が受け取る姿、大手町のゴールの瞬間など様々なドラマやエピソードがあり、自然と「がんばれー」ということばが出てきます。そのような中、「繰上げスタート」は様々な事情があるにせよ、非情かつ理不尽さを感じるルールだといつも感じています。前の選手がすぐそこまで来ているのに　規定の時間になれば繰り上げスタートが合図されます。今年もある大学は目の前まで来ているのにあと４秒というところで間に合わず、１０区から繰り上げスタートになってしまいました。そこが勝負の厳しさでもあるとも感じました。しかし、陸上のリレーは１本のバトンをつなぐからリレーであるように、駅伝も１本のタスキをつなぐから駅伝なのかとも思います。私たちが学校でタスキをつなぐことは、誰もが見ても錦台中学校のすばらしい所をその学年で途切れさせることではなく、長くつないでいくことです。それには一人ひとりの力を合わせてつないでいき、錦台中というチームが一丸となっていくことが大切だと思います。

さて、７日より３学期が始まりました。子どもたち一人ひとりが今まで以上に安全で安心して過ごせる学校となるよう、教職員一同努めてまいりたいと思います。本年も保護者・地域の皆様の変わらぬご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

＜東日本大震災の被災地を訪ねて＞　　副校長　栗田智則


奇跡の一本松

三校共同（錦台中・西寺尾小・西寺尾第二小）で実施した東日本大震災復興救援募金につきまして 12 月発行の学校だよりで報告をさせていただきました。この冬季休業を利用して、東日本大震災の被災地に足を運ぶ機会を得ることができました。ボランティア等で何かをするために行ったわけでないのですが、自分の目で直視し、被災された方々の話を聴くことで、「記憶に残し、伝え続ける」ことができればと感じています。

まず、福島県の原発事故の被害があった双葉町、浪江町、南相馬市に向かいました。車で移動をしたのですが、開通している道路から町の入り口になる道路がすべてバリケードで封鎖されており、「帰宅困難地区」「自動二輪、歩行者立入制限」「只今の放射線量〇〇μSv（ﾏｲｸﾛｼｰﾍﾞﾙﾄ）」などの表示があることに改めて驚きました。テレビ報道で観た除染作業後の汚染土などが多く積まれている光景と、ひと気の少ない町並みを見て、本格的な復興にはまだまだ時間がかかることを実感しました。南相馬の道の駅に立ち寄った際に、農産物直売所で野菜などを満面の笑みで販売している方々に出会うことができました。わが町の立て直しをできるところから始めている姿に感動をしました。

ダンボルギーニ？

次に、福島県から北上して、宮城県女川、石巻、南三陸、気仙沼、岩手県陸前高田へ。ＪＲ女川駅前のテナント型商業施設「シーパルピア女川」では、震災後、急激な人口減少が進む中で、地元の方々の「新しい町をつくるんだ」という熱い意気込みが伝わってきました。そこで販売しているホタテやツブ貝、カキなどの海産物を美味しくいただきました。石巻の段ボール加工会社がスポーツカー「ランボルギーニ」を模して製作した段ボール製の「ダンボルギーニ」も展示されていて、来場者の足を止めていました。もっと多くの人で応援したいと実感しました。

防災庁舎と盛り土

石巻市釜谷地区の北上川河口から約４km の川沿いに位置する大川小学校。そこで甚大な被害があったことは、今もなお残っている校舎からも想像できて、改めて言葉を失いました。報道で知っていましたが、直接目の当たりにして背筋に電気が走るような衝撃でした。南三陸町の防災庁舎では、防災放送で町の人々に避難を呼びかけ続けて被災した女性職員の魂を胸に刻む思いでした。「あの日を忘れない」との思いを強く感じました。あの奇跡の一本松が話題になった陸前高田では、工事現場の交通誘導をしている方から当日の様子を伺うことができました。海岸から７km まで波が押し寄せ、その高さは 14mまで達したこと、そして「高台へ」と声を掛けて避難したことを語る目は、必ず立ち上がる決意に輝いていました。

被災地では、各所で献花台や慰霊所が設けられていました。同時に、多くの重機やダンプカーが起動していて、車のナビには表示されない道路が新しく作られていたり、津波被害にあった病院や防災庁舎の屋上と同じ高さまで盛り土がされたりしていて、復興の槌音が響いていました。それでも残念ながら家屋の再建までには、まだまだ時間がかかるのかもしれません。

気仙沼で出会った現地の方々のお話の中で、「百年に一回のことをどれだけ伝承できるか」「子どもたちがいるから復興する力になる」「人のためにできることをしていく…それは必ず自分に返ってくるから」「一万円の義援金には一人が一円ずつ応援してくれたとすれば一万人の思いと応援がある。だから、感謝の気持ちを絶対に忘れない」このような言葉がとても印象に残りました。三校で取り組んだ募金が、少しでも現地の皆さまの勇気につながってほしいと本当に思いました。